



【戦後80年 語り続ける写真たち ～公文書館一帯は陸軍駐屯地だった～】

その3 大分駅での出征兵士壮行風景

大分駅は平成27（2015）年に駅ビルとして新しくなってから、今年で10年を迎えました。駅の始まりは明治44（1911）年、豊州本線の終着駅としての開業です。

太平洋戦争末期、米軍からの空襲被害も受けた初代駅舎は、昭和33（1958）年に2代目駅舎に建て替えられ、現在の3代目駅ビルへと生まれ変わりました。

画像は、初代の大分駅舎前での、支那事変の戦地へ出発する兵士を送る様子を写したと思われるものです。

駅舎の壁には「支那事変」の文字と日の丸が描かれたポスターが見え、正面ファサードの時計は8時50分頃を指しています。この時計は当初は設置されていなかったのですが、遅くとも昭和13（1938）年には掛けられていたようです。



敬礼をする兵士たちは30歳代と思われる人が多く、向かって左側に見える女性や子供たちはその家族でしょうか。凛々しく敬礼をする兵士たちですが、見送る人々にはどこか沈痛な面持ちが感じられます。

現在の大分駅は、たくさんの人が訪れ、旅立っていく心躍る場所です。

しかし、この写真に写る人々にとってはどのような場所だったのでしょうか。

駅に立った時、私たちの日常を支える平和について考えてみませんか。

資料

- ・「森肇氏旧蔵アルバム」より「大分駅での出征兵士壮行会風景」